

近現代中国におけるキリスト教——ジェンダー変容の視点から——

石川 照子

私の専門は中国の近現代史、特に女性史、ジェンダーで、社会史の視点からキリスト教についても研究を行っています。

時代としては大体一九二〇年代から四〇年代、中華民国から中華人民共和国初期位までを対象に、女性とキリスト教との関わりについて取り組んでいます。特にYWCAという団体、これは日本にもある世界的な組織ですが、中国でも実は清朝末期にできて現在も活動を続けており、そのYWCAを初めとするキリスト教の女性運動を主として研究しています。具体的には中国においてキリスト教の果たした役割ということ、あるいはそれが女性やジェン

ダーの変容といったことについてのどのような意義や影響を与えたかといったことに、関心を持っています。

ご存知の通り中国は現在目覚ましい経済発展を続けています。私は二〇〇九年の四月から二〇一〇年の三月まで、職場の大妻女子大学の在外研修制度を利用して、一年間上海に滞在しました。二〇一〇年の五月一日から一〇月三日まで、上海で半年にわたって世界博覧会が開かれました。私がちょうど上海に滞在していたその一年というのは、まさに万博開催直前の時期であったわけです。

いわば万博の準備に国を挙げて、あるいは上海全市を挙

げて取り組んでいたという時期なんですね。ですから例えば万博関連の建物や、その他の施設が次々と建っていったり、あるいは地下鉄の新しい路線が作られたり、既存の路線が延長したりという、まさに町全体が工事現場のように日ごとに姿を変えていくという時期でした。そして、自分自身がそこに身を置いて、現在世界で恐らく一番変貌の大きい都市、それが上海なんだということを実感し、その中で渦巻くエネルギーというものをひしひしと感ずることができました。上海は経済が非常に活発で勢いがあり、そこにビジネスチャンスがありますから、世界中から人やモノや金や情報が集まっているという、そういうエネルギー、パワーがごうごうと渦巻いている都市だということを実感させられたわけです。

中国に行くたびに、私もいろいろなパワーをもらって帰ってくるのですけれども、同時に中国の光と陰の部分とこのを感じさせられ、その陰というのはやはり格差の問題だと思えます。沿海部の非常にめざましい発展に比べて内陸部の辺鄙な農村、農村自体も停滞して変わっていないというわけではないですが、都市の変貌が急速なため、むしろ沿海部と内陸部との格差は拡大しているという状況が

あります。上海の町の工事現場も、そこで働いているのは上海の人たちではなく、多くは内陸の農村から出稼ぎに来た人たちで、飯場のような所に寝泊まりして、懸命に働いている姿をあちこちで見かけました。そういう格差というのは、現在中国において大きな克服すべき課題となっています。

本日は宗教、特にキリスト教と女性、ジェンダーの変容ということについてお話をしますが、それが中国のこれから、今後の中国がどうなっていくのか、どのような国になっていくのかということを考える際にも、重要な視点を与えてくれるのではないかと思います。

はじめに

本日の私の報告ですが、近代中国におけるキリスト教の役割と意義というものについて、女性、それからジェンダーの視点から考察してみたいと思います。さらに、現代中国におけるキリスト教といった問題についても、若干触れてみたいと考えています。

まず研究状況について、少しお話しておきたいと思えます。中国の近現代史研究においてキリスト教研究というの

は、長い間非常に周辺のな位置にありました。それは何故かといいますと、中華人民共和国、すなわち社会主義中国が成立して以来、キリスト教の位置づけがどうであったかということと関わっています。すなわちキリスト教というのは、イコール帝国主義の手先であるとされてきました。

アヘン戦争に敗北した中国は、それから列強の侵略をたびたび受けて、約一〇〇年余り後によく中華人民共和国という社会主義国家を建設しました。中国は非常に広大ですから、丸々全体が植民地になったわけではないですが、進出してきた列強がそれぞれ支配地域を決めて分割支配して、租界等が置かれていったわけです。帝国主義の軍隊の前に先兵としてまずやって来たのが宣教師たちであるとされ、その意味でキリスト教というのは、まさに中国を侵略する帝国主義の手先であると歴史的役割が規定されてきたわけです。

その中において、近代中国の様々なキリスト教運動というのが出てきて、重要な歴史的役割を果たしたわけですが、総じてそうした運動に対しては低い評価というのが与えられてきました。一方において、キリスト教の帝国主義的な性格というのが強調されてきたわけです。ですから研究等

でキリスト教について触れられたとしても、それは非常に批判的、否定的なトーンで論じられてきたというのがほとんどであったと思います。

ちなみに、こうした中国での研究傾向というのは、日本の研究にも少なからず影響を与えたと思われます。従来日本における中国のキリスト教研究といえますと、前近代を中心としたキリスト教の宣教史、伝道史というのが主流であり、それはそれでかなり多くの成果を上げてきました。

しかし、より広い問題、例えば現地中国の社会や人々の側はキリスト教というものをどう受容していったのか、またそれによって自身の主体的活動というものをどのように展開していったかという、いわば中国の人々の側に立った視点からの研究というのは、それほど多くなかったように思います。

こういう状況はしばらく続きましたが、八〇年代以降中国における研究状況は大きく変わっていきます。四九年の中華人民共和国建国以来の指導者だったのが毛沢東ですが、彼が七六年に亡くなります。そして次の指導者として登場してきたのが鄧小平でした。鄧小平は八〇年代以降、本格的に改革開放政策というのを始めます。国を開いて外国企

業や資本を積極的に導入していくという政策が成功して、現在に至るような中国の目覚ましい経済発展を実現していくこととなります。

そういう時代に入って、研究面でも大きな変化がありました。中国でのキリスト教に対する再評価と研究というのが、大体この八〇年代以降始まっていくこととなります。そして特に九〇年代以降、いわゆる社会主義市場経済、市場経済化というのが非常に加速していくのですが、キリスト教が歴史的に果たした役割についても、かなり多様なテーマが取り上げられ、客観的、多面的に再検討していくという作業が本格化していきます。現在中国においてキリスト教研究というのは、それを担う研究組織もかなり拡充されてきており、研究テーマも広がって着実に進展しつつあるという印象を強く受けます。かつては、これはキリスト教研究だけに限らないのですが、中国の研究者たちと議論すると紋切り型のパターン化した社会主義イデオロギー、革命史観から、様々な事象の位置づけが単純化して行われていたのですけれども、現在ではかなり客観的、実証的な研究というのが増えてきていると思います。外国人研究者と中国人研究者との間の議論が大変かみ合うようになり、

実証的な優れた研究が中国から出てきているなという印象を非常に強く持ちます。

その中で、キリスト教と女性の問題というものも、研究の非常に重要なテーマとして認識されてきています。この報告ではそうした女性、ジェンダー視点にまず立って、中国におけるキリスト教というものを考えてみたいと思います。その上で、その運動と意義というものを再検討してみたいと思います。さらに言うならば、そうしたところから得られた知見というものが、現在の中国、あるいは今後の中国のことを考えていく上では、どのような視点と何を切り開いてくれるかといったところにつなげていけたらと思います。

一 キリスト教と近代中国

(1) 研究状況

先ほども少し述べましたが、近代中国においてキリスト教が果たした役割に関する客観的かつ本格的な研究というのが始まってから、まだそれほど長い年月がたっているわけではないのですが、現在までに既に多様なテーマの研究成果が現れてきています。中国においてキリスト教研究を

担う機関にはどういったものがあるかという点、一つは北京にあります中国社会科学院の世界宗教研究所キリスト教研究センターです。社会科学院というのは国家機関で、いわば中国のアカデミーということになりますが、このキリスト教研究センターからもいろいろな研究書が出版されています。

より先駆的にキリスト教研究に着手したのが華中師範大学で、湖北省の省都の武漢にあります。長江の少し中流にあるかつての武昌で、一九一一年一月一日のこの地の武装蜂起から辛亥革命が始まり、清朝が倒され中華民国が成立していく、いわば近代革命のまさに発祥の地です。この章開沅先生という中国近代史研究の泰斗と言えるような方が、中国における教会大学、ミッションスクールの研究分野を切り開いて、この華中師範大学の中に中国教会大学史研究センターというのを設立されました。そして、特に教会大学をどう位置づけたかという点、中国と西洋、いわば文化交流の産物、そのクロスした現象として教会大学を理解し、その社会貢献等の特性というものを客観的、全面的、科学的にとらえるということ、この章開沅先生は主張されています。この二つが代表的な研究機関として挙

げることができると思います。

今述べました華中師範大学中国教会大学史研究センターが、その前に述べました社会科学院のキリスト教研究センター等と共催して行った一つの重要なシンポジウムが、二〇〇〇年八月に開かれました。それが「基督教の中国伝来と中西文化交流」というシンポジウムでした。これは武漢で開催され、キリスト教と中国、中国と西洋、中西文化交流というテーマが掲げられたわけですが、中国のキリスト教史研究者が集まった全国的な会合としては初めてのシンポジウムであったということです。具体的には、中国人宣教師や、抗戦期のキリスト教大学等、様々なテーマが報告されています。

こうしたキリスト教をテーマとしたシンポジウムというもの、現在他にもかなり活発に行われてきています。また、香港は歴史的に見てもキリスト教研究というのは盛んに行われているということ、つけ加えておきたいと思えます。

そうした研究成果というものは、現在までに多数の研究書という形で刊行されています。例えば顧長声、顧衛民、陶飛亜といった人たちが代表的な中国の研究者で、『基督

「教与中国研究書系」（上海古籍出版社）という叢書も出されて、まさに研究の多元化、細分化というものが進んできているなと思います。⁽¹⁾

(2) 各種社会事業の展開

いわば西洋文化の核心と言えるキリスト教というものが、中国、東アジア近代へ移入されたわけですが、それはどういう意味を持ったかという点、近代化、西欧化というものを当該地域にもたらしたと同時に、その地域の植民地化というのを促すこととなったのも事実であったと思います。先ほども述べましたが、中国ではキリスト教と宣教師というのには、まさに帝国主義の先兵という形で、時に激しい攻撃の矛先を向けられたりします。例えば教会や宣教師を襲撃した事件、中国語では「教案」といいます。「案」というのは中国語では「事件」といった意味で、日本語の「教案」の意味とは全く違います。

あるいは、キリスト教というものを受容する時に中国の文脈、または歴史に沿った受容、変容というものが試みられました。これは中国語では本色化運動という言い方をします。後で述べますが、一九二〇年代以降外国への反発、

排外主義的な傾向というのが強まってゆく中で、この本色化運動、キリスト教の中国化という運動が展開されます。

このように、キリスト教全般に対しての厳しい印象、あるいは位置づけというのがなされましたが、同時に人道主義と国際主義という特質を備えたキリスト教というのは、その現地において例えば貧民救済の慈善事業であるとか、社会改良活動、あるいは学校の設立や出版事業といった社会事業を積極的に展開していきました。すなわち、社会の改良と変革というものに大きな貢献をしたということも事実であると思います。

こうしたキリスト教の両面を、私は見ていかなければいけないのではないかと思います。恐らく一九七〇年代までの中国というのは、その前者、つまりキリスト教というのは専ら帝国主義の象徴である、先兵であるという認識によって一元化されていたと思うんですが、八〇年代、とりわけ九〇年代以降は、歴史の文脈に沿ってキリスト教というのが果たした役割を、客観的かつ実証的に見ようという機運が非常に高まってきました。こうしたいわばキリスト教の持つ両義性というものを十分に認識した上で、その歴史的役割というものを実証的にとらえていく、見ていく

必要があるのではないかと思ひます。⁽²⁾

次に、近代以降のキリスト教の中国での展開というのを見ていきたいと思ひます。明代や清代においてもカトリック伝道は非常に活発に行われたのですが、中国におけるキリスト教伝道が本格的に行われるようになったというのは、先ほどの一九世紀半ば、アヘン戦争による開国以降であつたと思ひます。それ以降、プロテスタントのキリスト教団の中国進出というのが一段と加速していきます。宣教師たちが続々と中国の沿海都市から、さらに奥地へも入つていくようになっていくわけです。

その際に宣教師たちほどのように伝道していったかといふと、西洋の科学技術や知識というものを布教の助けとして中国に伝えていきます。特に一九〇〇年の義和団事件以降、教会やキリスト教団体の社会事業というのは大変活発化していきます。例えば、印刷・出版事業、学校や病院の設立、博物館・図書館・ラジオ放送局の開設や、慈善事業・社会改良運動というものが非常に活発に展開していきます。そして、カトリックより遅く入つていったプロテスタントの方が、こうした社会事業に熱心に取り組んだと言われています。

そういう中で、一八六〇年以降、各教団、ミッションの中国大陸進出における重要なセンター、拠点となつていたのが、まさに上海であるわけです。⁽³⁾

例えば、印刷・出版事業について言いますと、一八五〇年に上海郊外の青浦蔡家湾という場所にカトリックの孤児院が作られました。そこで木版印刷が始まっています。その後印刷技術は急速に発達していき、出版物もキリスト教関係のものから新聞や教科書、西洋の社会制度や科学技術に関する翻訳書や一般書籍へと広がっていきました。例えば一八六八年には、プロテスタント系のメソジスト教会の宣教師だつたヤング・ジョン・アレンというアメリカ人によつて、『万国公報』という雑誌が創刊されました。この『万国公報』というのは、確かにクリスチャンたちによつて作られた雑誌ではあるんですが、その内容を見てみると、実は宗教的なことだけでなく世界の時事を初めとして、西洋の科学知識や政治論説等の記事も盛んに掲載されていて、多くの読者を獲得していました。とりわけ中国の清朝における改革派である変法派の人たち等の思想にも、大きな影響を与えたと言われています。

次に近代的な学校・病院の設立ということですが、これ

は特に上海においては先駆的取り組みとして非常に重要な役割を果たしていました。アヘン戦争後の一八四二年の南京条約後、五つの港が開放され、その一つが上海でした。

それ以降、欧米列強は続々と上海に進出して租界を形成しましたが、一方、中国の人たちが集中して住んでいた華界というのがありました。今は観光地になっている豫園の辺りですが、かつてはそこが上海の中心であったわけですが、上海はその租界と華界に非常に複雑に分断されていたわけです。そのため近代的な学校制度というものの実施というのは非常に難しかったわけですが、そういう中で教会やミッションが学校や病院を作ったということは、重要な意義を持っていました。

後で女子教育のところでも述べますが、早くも一九世紀半ばには教会学校が誕生しています。その性格は、歴史を辿る中で大きく変わっていきます。当初は、最下層の子弟を対象とした慈善事業的な初等教育からスタートしました。それがやがて中学校や大学という、上級レベルの学校ができて規模が拡大され、学生たちも裕福な家庭の出身者が増えていきました。カリキュラムにおいても、当然聖書等宗教教育は重視されましたが、それ以外に英語、算術、化学、

物理といった科目も設けられていて、そうした科目を通じて近代的知識というものが学生たちに与えられていきました。そして、上海だけでも大学がいくつも作られています。カトリックでは震旦大学、震旦女子文理学院、プロテスタントではセント・ジョン大学（聖約翰大学）、滬江大学、東呉大学法学院、三育大学、上海基督教女子医学院等が挙げられ、現在はそれぞれ合併したり消滅したり、あるいは別の大学に生まれ変わったりしています。

それから、病院も一九世紀半ばの医療伝道から始まって、近代的医療機関として発展していきました。

その他上海では、中国で最初の自然博物館や大学・団体・出版社の図書館、あるいは一九三三年にはプロテスタント系の出版機関のビルの中に、上海福音放送局というのが開設されたりしています。

さらに慈善事業や社会改良運動として、孤児院が一九世紀半ばから次々に設けられていきます。上海最初の孤児院で、中国国内で最大のカトリックの孤児院であったのが土山湾の孤児院で、ここでは子供たちが宗教画を描いたり、家具や食器等を製作する技術を学んだりしました。

それから、後で詳しく述べますが、不纏足運動（纏足反



図1 教会の塾で学ぶ子供たち

出典：潘翎編『上海滄桑一百年 一八四三～一九四九』（海峰出版社、1993年）。

対運動）や、遊郭の妓女たちを收容・教育する教養院や習芸所の設置等も行われました。また、アヘンの禁止を主張した拒毒運動（毒はアヘンのこと）、これは一九二四年に設立されたプロテスタント系の中華国民拒毒会等が中心になっていたわけですが、このような様々な社会改良運動というものも積極的に取り組まれていました。

図1は、上海のカトリック教会が開設した塾です。まだ幼い子供たちが沢山います。この子供たちは下層階級の子供たちで教育の機会はなかったわけですが、教会は生きてい

くための様々な技術や文字を教えるということをやっていました。

二 キリスト教と女性、ジェンダー

(1) 研究状況

近代中国におけるキリスト教と女性、あるいはジェンダーとのかかわりということですが、キリスト教と女性に関しては先ほども述べましたが、様々なテーマの研究が進展しています。特に盛んなのが女子教育についてです。⁽⁴⁾ それから、アメリカでも中国におけるキリスト教と女性、ジェンダーについての研究といのはなされていて、特にアメリカ系のミッションや宣教師の中国における布教と活動について成果が出されています。⁽⁵⁾

そういう中で、二〇〇五年五月に上海大学で一つのシンポジウムが開かれました。「ジェンダーと歴史―近代女性とキリスト教」というタイトルですが、これはキリスト教と女性研究において大変重要なシンポジウムであったと思われる。中国の歴史学会として初めてのジェンダー研究とキリスト教史をテーマにしたシンポジウムで、文献・資料研究や女子教育、女性宣教師について等様々な報告がな

されています。⁶⁾そして、近現代中国のキリスト教研究における女性史、ジェンダー史からの分析というものが非常に不可欠なものであるということが示されました。このようにキリスト教と女性、ジェンダーとのかかわりについても、現在は多彩な研究がなされています。

さきほどからジェンダーという言葉を使ってきました。この言葉を既によくご存じの方々も多いかとは思いますが、聞き慣れないという方もいらっしゃるかもしれませんので、簡単にその概念について触れておきたいと思いません。

元々は英語で、アルファベットではGENDER、ジェンダーですが、ジェンダーというのは生物学的に男性、女性と規定する概念のSEX（セックス）に対して、文化的、社会的に規定された男性、女性、あるいは男らしさ、女らしさ、男性と女性の差異を意味します。すなわち社会的、文化的な差異、あるいは男性性、女性性といった概念ですが、既に国際的には学術研究の基軸的な概念として定着していますし、新たな今後の知のパラダイムというものを構築していく上で重要な意義を持っています。

一九九五年に国連の第四回世界女性会議というのが、中

国がホスト役となり北京郊外で開催されました。世界女性会議とは、国連という国際レベルにおいて女性の問題を五年に一度定期的に話し合うものです。そしてこのジェンダーという概念は、その会議前後に中国にも導入されました。中国語ではジェンダーというのは「社会性別」と訳されました。「社会」をとって単に「性別」と言う場合もあります。今ではこのジェンダー研究というのは、中国でも非常に活発に行われています。

日本の中国研究でも、従来の中国の近現代史を革命史、あるいは共産党史というものに一元化しないでとらえる見方というのが提起されてから久しいのですが、その中でジェンダー視点の有効性というのが提唱され、ジェンダー史研究というのがその担い手も含めて徐々に広がっています。また、二〇〇四年一二月にジェンダー史学会が設立されましたが、この学会はジェンダーの視点と歴史的な視点を入れながら、世界各国ないし地域の様々な事象というものを分析・検討し、そこから新たな知を開拓しようという思いのもとにできたものです。私自身も現在この学会の役員をしており、設立から現在まで六、七年たちますが、既に会員が四〇〇名位になっておりまして、関心の高さとい

うのをうかがうことができます。

(2) 反纏足運動

次に、近代中国におけるキリスト教と女性、ジェンダーとの関わりを見ていく時、非常に大事なテーマを二つほど指摘したいと思います。まず一つ目が反纏足運動（纏足反対運動）、二つ目が女子教育です。

まず反纏足運動ですが、先ほども述べましたように、近代中国においてキリスト教が行った社会事業というものは、中国社会の改良と変革に大きく貢献したわけですが、それは必然的に女性たちの状況というものを劇的に変えることにもなりました。

反纏足運動に最初に着手したのは、キリスト教の宣教師



図2 纏足の女性

出典：柯基生『三寸金蓮』（産業情報雑誌社、1995年）。

たちでした。纏足自体は大変に根強い現象でもあって、その起源もいろいろ言われていますが、一〇〇〇年以上続いた風習であるわけです。当初は上流階級から始まったのが、その後一般庶民にまで広がっていった、明代、そして特に清代になって非常に普遍化していきます。ただ、地域差もかなりありますし、客家の女性たちというのは纏足をしていなかったといったことがありますが、大きな足では結婚できない、お嫁にいけないということで幼少期に女の子の足のくるぶしから下を縛って、その成長を止めました。その結果歩行困難にただけではなく、女性の日々の行動も制限するようになっていったわけです。⁽⁷⁾

図2が纏足の女性です。ちよつと分りづらいかもしれませんが、足が大変小さく三寸、一〇センチ位で成長を止めているわけです。纏足のやり方というのは、足の親指を残して残りの四本の指を土踏まずの方にぐつと折って、ぐるぐると包帯等で縛り大きくならないようにしました。

私は八〇年代の後半位から中国に行きだしたんですが、まだその頃はこの纏足をしている女性を少し郊外の方では見かけました。清朝末期から何度も禁止令が出たんですが、日中戦争中も禁止令が出ていたことから、かなりこの風習

というものが根強く、そう簡単には廃絶されなかつたということがあるがええます。

清末になって反纏足運動が展開されていきますが、先ほど申しましたように、それは最初はキリスト教の外国人宣教師たちから始まります。一八九五年にはイギリス商人の妻のリトル夫人が「天足会」（天足は自然の足という意味）を設立しました。やがて日本に留学した中国人学生たちに広がり、さらには康有為、梁啓超、譚嗣同ら変法派の男性知識人たちによって運動は頂点へと達していきます。

当時アヘン戦争後の中国が列強に翻弄され侵略されていく中で、いかに国を立て直すか、国を強化するかということが、清朝の大変大きな課題でした。つまり反纏足というのが、富国強兵とそのための女性の「国民化」というところに結び付けられていたということです。変法派の男性知識人たちは、外国人宣教師たちのまなざしというものを強く意識して、纏足というものをそれまでの文化の象徴であった「国粹」から、遅れた野蛮な文化、風習、習慣である「国恥」へと転換していきました。そうした彼らのナショナルな言説において、醜さの象徴というものに女性の身体が使われていたということも言えるのではないかと思

います。

この纏足の評価についてはいろいろあり、日本語の研究もかなりあります。身体変工というものを余儀なくされ、さらに時代の要求の変化に翻弄され、苦しめられていたのは、まさに当事者である女性たちであるわけです。しかし、女性たちが自立する契機というものをも最初に付与したのが反纏足運動であったという意味において、私自身は外国人宣教師たちの始めた運動の意味は、やはり大きかったと言えるのではないかと思います。

(3) 女子教育

外国人のキリスト教ミッションが建てた教会学校というのは、中国の近代的女子教育の非常に先駆的な役割を果たしました。最初は男性宣教師の妻や女性宣教師たちが、キリスト教布教達成のために中国の女性たちに聖書を読める識字能力を施すために学校を作っていくわけですが、次第に女子教育が普及していく中で、それは女性の職業化、社会進出を促し、女性解放へも大きな貢献をしたと思います。⁸⁾近代女子教育の先駆的役割を果たしたという意味はどういうことかという点、一九世紀半ばにはミッションスクー



図3 実践女学校の中国人女子留学生たち
 出典：『大陸』第1号(上海、1902年)。

ルの女子学校が作られています。清朝政府の正式な学校制度の中に女子教育が導入されたのは一九〇七年で、実に二〇世紀になってからであり、まもなく辛亥革命という清朝最後の段階でした。一九〇七年に清朝政府は「女子小小学堂規則」と「女子師範学堂規則」を公布します。ようやく小學校レベルに女子の学校教育がこれで導入されたわけです。それよりも半世紀以上も前に、中国最初の教会女子学校が既に始まっていたということです。

一八四四年にイギリスの東方女子教育協進社という団体のアルダーシー女史が設立した、寧波女塾がその嚆矢でした。その後各地の教会のある所には教会運営の学校が次々と建てられていきます。一九三四年には女子中学が一〇二ヶ所あり、その初級・高級女子中学生（初級中学は日本の中学、高級中

学は高校）は合わせて九八九名を数えました⁽⁹⁾。もちろんこれは中国全体の女の子から見ればほんの僅かではあります。が、全く女子が学校という場で学べなかったという状況に、正に最初に風穴を開けていったのがミッションスクールであったわけです。当初は布教の助けとしてこれらの学校は運営され、教会の仕事を支える女性や良妻賢母の育成がその目的でした。しかし後には大きく変わっていき、清朝の末期から外国に留学する女子学生も輩出しました。

図3は日本に来ていた中国人女子留学生たちです。みんな羽織袴姿で、現在の実践女子大学の前身である実践女学校の学生たちで、真ん中に座っているのが下田歌子です。有名な清末の女性革命家の秋瑾もこの実践女学校で学んだ一人でした。

こうした近代的女子教育を受けた女性たちの代表が、ご存じの方も多いかと思いますが、いわゆる宋家の三姉妹です。宋藹齡、宋慶齡、宋美齡という中国で最も有名な姉妹と言われますが、次女の慶齡は孫文の夫人、三女の美齡は蒋介石の夫人となり、中国のファーストレディとして、その後数奇な運命を辿っていきます。その宋家の三姉妹を卒業生にもつ上海の名門ミッションスクールが中西女塾で、後に

表1 キリスト教大学と中国高等教育(1923年)

大学・専門学校	学校数			学生数			
	男	女	計	男	女	計	%
国・省・私立	105	1	106	30,903	665	31,568	87.7
教会・外人立	19	2	21	4,119	299	4,418	12.3
合計	124	3	127	35,022	964	35,986	100

出典：佐藤尚子『米中教育交流史研究序説—中国ミッションスクールの研究』（龍溪書舎、1990年）。

中西女子中学となり、現在は上海第三女子中学として存続しています。

この学校の一九二二年のカリキュラムを見ますと、聖書、国語（中国語）、英語、歴史、算術、地理、生物学、化学、物理学、天文学、衛生学、フランス語等が設置されています。英語を非常に重視しており、卒業後女子大学に進学する

ような近代的なタイプの女性を生み出しました。いわば教会女子学校というのが、こうした近代的な新しい知識を身につけた女性たちを多数輩出したということが言えると思います。この宋家の三姉妹ですが、他に男の兄弟も三人いて、その中で宋子文は中華民国時代の財務大臣、外交大臣等を務めました。三姉妹と三兄弟は全員アメリカに留学しています。父親の宋

嘉樹は海南島の出身で自身もアメリカに滞在したことがあり、大学で学んだ後、宣教師となって上海に戻ってきました。

宋家一族が揃う貴重な写真が残されているのですが、その写真を見ると、撮影当時の一九一七年頃は中国服を着ている人が多い中で、満年齢、慶年齢、美年齢、そして子文も洋服を着ているのが分ります。母親の倪桂貞は伝統的な服を着ています。母親は熱心なクリスチャンで、父親は宣教師の後に実業家に転身して成功しました。そして戦前日本人が多数住んでいた上海の虹口地区（ホンキョウ）のメソジスト教会景靈堂に、家族は通っていたと言われます。

三姉妹はみなアメリカのジョージア州メーコンのウエスレアン・カレッジに留学して、その後宋美齡だけはヒラリー・クリントンの出身校でもある、マサチューセッツ州のウエルズリー女子大学で学びます。

表1のデータからも、中国の高等教育において教会大学というものが果たした役割の大きさというものが分ると思います。

各地に教会大学が創設される中で、南京には金陵女子大学（1）というものが誕生しますが、その第一期卒業生に呉怡芳と

いう女性がいます。呉はアメリカに留学して生物学を学んで帰国し、後に母校の金陵女子大学の校長になります。それは中国で初めての女性校長の誕生でした。このように宋家の三姉妹や呉怡芳のように、遠くアメリカ等外国に留学する女性たちも出てきたわけです。また、金陵女子大学以外にも、北京の華北協和女子大学（一九〇五年創設。最初の教会女子大学）、福建省福州の華南女子文理学院等が設立されました。

このように、キリスト教が近代中国の女性に与えた大きな影響というものは、一つは纏足反対の運動であり、もう一つは女子教育であるということが指摘できると思います。

三 中国YWCAの思想と活動

次に、中国のYWCAについて触れてみたいと思います。このYWCAの活動の中には、キリスト教の精神とその影響と、かつての伝統社会の女性とは違う近代的な女性の姿というものを見ることが出来ます。

(1) 歴史と概要

中国YWCAは正式には中華基督教女青年会といい、英

語ではYoung Women's Christian Association of Chinaとなります。まず清朝末期の一九〇年に浙江省杭州の弘道女子中学校というところに、アメリカ人宣教師によって学校YWCAが設立されました。日本のYWCAもこれよりは遅れて、同様にアメリカ人宣教師たちの指導のもとに設立されました。日中YWCAは共に世界各国の中でも、特にアメリカのYWCAとの密接な関係を持っていました。

そして、中国YWCAは現在も存続しています。つまり清朝末期、中華民国、中華人民共和国という激しい時代の変化を生き抜いてきたわけです。YWCAのような社会団体というのは他にもあり、男性の場合のYMCA、これはYWCAよりもさらに早く誕生していて、現在も活動を続けています。中国の様々な社会団体の中でも、こうしたYMCA、YWCAのような長い歴史を持つ団体というのは、他に類をみないと思います。

YWCA自身は、国際主義というものを標榜し、女性を対象とする社会的組織化を目指していました。キリスト教信仰に基づく、都市中間層女性たちが結集してきた社会団体であると言うことができます。⁽¹²⁾ 世界YWCAの本部はスイスのジュネーブにあり、私も一度資料調査に行つたの

ですが、中国YWCAと世界YWCAとの間で取り交わした書簡等がかなりきちんと保管されています。そうした資料を通して、中国YWCAや日本YWCA等の古い時代の活動を知らることができます。

中国YWCAは一九〇六年に、この世界YWCAに加盟します。二年後の〇八年には、最初の都市YWCAである上海YWCAが誕生しています。その後廣州、北京、天津等各地に設立され、現在も各地で活動を続けています。二三年一〇月に第一回全国大会が開かれた後に、全国協会が上海に設置され、徐々に組織体制が整備されていきます。会員数も順調に増えていき、二〇年には六四一四人だったのが、八年後には一万一〇〇〇人に増加していきます。

先ほどの誕生の経緯から見ましたように、当初は外国人、特にアメリカYWCAの幹事たちの強いリーダーシップのもとで中国YWCAは設立されたため、しばらくは実務のトップの総幹事はアメリカ人たちが担っていました。やがてアメリカYWCA等での研修を通して中国人の人材が育つていき、一九二六年には丁淑静が、初めての中国人全国協会総幹事に就任しています。

また、YWCAというのは確かにキリスト教の団体では

ありますが、その活動は当初から教会が行うような布教活動そのものよりも、社会活動に主眼が置かれていました。その中で多様な階層の女性たち、例えば主婦、女子職員、学生、労働者等のノンクリスチャンも含めた女性たちが活動の対象として想定されていました。

内部の組織は、例えば一九二〇年代には学生部、宗教教育部、編輯部、労働部、幹事練習「訓練」部、郷村部、職工事業部、児童部等が設置されています。そして特に、職業女性の為の託児所設置と女工の為の夜間学校の開設・運営が、重要かつ活発に行われた活動として挙げるべきです。上海等は特に近代産業が発展して工場が次々とできるわけですが、そこで働く多くの女工たちは近郊農村等の出身で、ほとんど学校等に行つたことがないわけです。その女工たちに文字以外にも歴史や文化、社会等いろいろなことを教えました。こうした夜間学校は上海市内に数ヶ所設置されました。さらに一九二〇年代、三〇年代になると、職業女性、近代的な教育を受けたいわゆるキャリアウーマンたちが中国でも沢山登場してきます。そうした女性たちの為の託児所というのが設置されていきます。

先ほど中国YWCAの国際性ということを言いました。

これは中国YWCAの大きな特質なのですが、それは世界YWCAの一部として本来的に国際的性格を持っていたということ以外に、特に中心的仕事を担った幹事たちが高学歴で、英語が堪能であるという人たちが多かったということも由来しています。クリスチャンホーム出身の人も多かったようです。さらに、世界YWCAやアメリカを初めとする各国YWCAと活発に交流をしていたということからも、その特質を見ることができます。

(2) 国際主義とナシヨナリズム

次に、そうした国際主義とナシヨナリズムとの関係というものはどうであったか、中国YWCAはどうとらえていたかということを見ていきたいと思います。

基本的には、国際主義とナシヨナリズムというこの両者を対立するものではなく、両立するものとしてYWCAは認識していました。『女青年』という中国YWCAの機関誌の一九二八年五月号に掲載された、アメリカ人幹事の杜愛倫（ヘレン・ソバーン）が書いた「YWCAはいかなる主義を信じるか」という文章に、そのことが端的に表れています。

この時代を考えますと、一九二〇年代の中国において、ナシヨナリズムの課題というのは非常に重要でした。一九二四年から二七年まで国民党と共産党が協力する、いわゆる国民革命というのが展開されました。しかしそれが二七年の蒋介石のクーデターによって決裂して、日中戦争が全面化する三七年七月の盧溝橋事件までの約一〇年間は、国民党と共産党が互いに対立、抗争したいわゆる内戦の時代でした。ですから中国の統一という課題の実現にはまだほど遠い状況でもあったわけです。そういう中で、このナシヨナリズムの課題は非常に重要でした。

一方で、外国への反発、排外主義的傾向を生んで、キリスト教の中国化、いわゆる本土化をめざす運動が展開される中で、中国YWCAがこのナシヨナリズムと国際主義というものが相矛盾しない両立するものであると提唱して、国際主義というものを非常に大事なものとしてとらえていたということであるわけです。それを、次に中国YWCAの日本観を例にとつて見てみたいと思います。

(3) 中国YWCAの日本観

中国YWCAが各国YWCAと活発に交流していく中で、

実は日本YWCAとの交流というものも、既に一九二〇年頃から始まっています⁽¹³⁾。そして、基本的には両者の交流というのは非常に良好に行われていたということが言えると思います。例えば中国YWCAの全国大会へ日本YWCAの幹事が出席したり、あるいは逆に日本YWCAの全国総会へ丁淑静総幹事が出席するといったような、日中相互の大会や会議への参加や相互訪問が、大体三〇年代の半ばまで続いています。

しかし、一九三一年九月一日、いわゆる満州事変、中国では九・一八事変と言いますが、その発生によって両者の関係は非常に大きく変わっていきます。この満州事変が勃発すると、中国YWCAは軍事侵略を行う日本を「日本帝国主义」と認識しました。その上で「日本帝国主义」打倒のための戦いを呼びかけ、かつ内戦停止・抗日救国を求めていきます。国民党と共産党は中国人同士が争っている場合ではない、より危険な外からの敵である日本と戦わなければいけないということで、内戦の停止と抗日救国ということを提唱していくわけです（閻宝航「日人占領瀋陽の経過和我們目前应有的努力」『女青年』一九三一年一月、洛夫「国際新形勢与熱河戦争」同、一九三三年四月、光煥「遠東局

勢与中国和平」同、一九三七年二月等）。

とはいえ同時にこうした日本に対する厳しい批判というのは、必ずしも日本人全体に向けて行われたわけではありませんでした。例えば嘯雲という人の文章は日本の軍部を批判的に紹介していますが、日本政府や軍部と一般の日本の大衆というものを、同一視しない姿勢というものを見ることができます（嘯雲「向未来大戦邁進中的一个国家」『女青年』一九三七年三月）。すなわち、冷静に日本や日本人を見ようとする視点が保たれていたということが言えると思います。

満州事変以前のような国際主義の強い主張というのは、確かにナシヨナリズムが高揚していく中では後ろに退いてはいきますが、日本人との連帯の可能性の模索は見られ、その国際主義の精神というのは失われることはなかったと思います。例えば林娜という人の文章には、「日本の労働女性は既に深く目覚めた。抑圧されているすべてのプロレタリアートと連合し、多数の抑圧された女性を組織しなくてはならないことを知った」と書かれており、いわば女性全体の連帯が叫ばれているわけです（林娜「日本労働婦人運動概況」同、一九三三年五月）。こういった記事が当時の

緊迫した状況の中でも見る事ができたわけです。

おわりに

日中戦争は一九四五年八月一日、日本の敗戦によって終わります。それまでは国民党と共産党の協力関係は一応保たれていたわけですが、日本という強大な敵がいなくなると、両者の間の矛盾は戦後徐々に高まっていきます。そして日中戦争終結から一年もたたない四六年七月には、再び内戦に突入します。最終的には共産党が軍事的勝利を収めて、四九年一月一日に中華人民共和国という社会主義の国が大陸に誕生し、国民党の蒋介石は、台湾に逃れて中華民国を継続することになります。

こうした中でキリスト教がどうなったかということ、その後のキリスト教ということ、少し紹介してみます。中華人民共和国成立後、共産党政権による「帝国主義」勢力の一掃の一環として、キリスト教も位置づけられていきます。特に一九五〇年に朝鮮戦争が起こり、中国は朝鮮民主主義人民共和国、北朝鮮の側を支援する為に義勇軍を派遣して、アメリカ軍が主力である国連軍、つまりアメリカと直接戦うことになるわけです。そしてアメリカに対する厳

しいまなざしが強まっていきます。中国のプロテスタント教会はアメリカとの関係が非常に密接であった為、中国とアメリカが敵対する状況の中で、より一層キリスト教というものの帝国主義的性格、アメリカとの関係性といったものを一掃するということが、強く打ち出されます。そしてキリスト教会の中の統合、一元化が進められて、キリスト教の中国化というものが促進されていきました。

プロテスタントは一九五四年七月に、中国基督教三自愛国運動委員会という一つの組織が成立して、その中でのが進みます。カトリックの側は一九五七年に中国天主教友愛国会というのが成立します。バチカン政府は、戦後内戦期は共産主義に対する批判を強めていて、国民党、蒋介石の側の支持を打ち出していました。その為、中華人民共和国において共産党は、プロテスタントよりカトリックに対して非常に厳しい姿勢を持っていました。それから、一九六六年から約一〇年間続いた文化大革命期の時代には、キリスト教は大変迫害されました。

一九八〇年代の改革開放政策の開始から現在までを見てみると、実はキリスト教信仰はそうした中でも存続して、むしろ信者の数は増えていると言われています。政府が認

定している公認教会だけではなくて、いわゆる非公認教会、地下教会もその数を増しています。これが何を意味するのか、中国の統一、社会統合の問題を考える時に、こうした現象をどうとらえるのかということ、非常に重要だと思います。八〇年代以降、中国は改革開放政策によって経済的には発展していきますが、お金がすべてだという拝金主義の傾向も非常に強まっています。それに対して矛盾や疑問を感じる人たちが、より精神の安定に拠り所を求める人たちもいるわけです。

また、中国の憲法では民国、人民共和国でも一応信教の自由というのは認められています。しかし、公認教会、非公認教会という名称があるように、政府は活動を認める教会と認めない教会を明確に峻別しています。これはキリスト教の場合だけではなく、他の宗教に対しても同様です。公認されていない宗教というのは、例えば気功から誕生した有名な法輪功のように、中国では邪教ということで弾圧を受けたりしています。キリスト教等の宗教を信じるということは一応保証されていますが、社会主義中国であるわけですから、宗教は実際には決して積極的に奨励されるわけではありません。そうした中国でどういう舵取りを

して生きていくのかということ、中国のクリスチャンたちは考え続けているのだと思います。

プロテスタントの中国伝来二〇〇周年に当たる二〇〇七年に、中国基督教三自愛国運動委員会主席の季劍虹さんという方が来日し、その時にこう述べています。「中国自体が、政府自体が今、格差を克服する調和のある社会の建設を目指していますが、宗教界にも協力を求めている。……中国の現実には合った独自の神学思想の建設が重要な使命であると、障害者支援や貧困家庭の援助等社会奉仕活動に力を入れていきます」。これは朝日新聞の二〇〇七年五月一二日の朝刊に載りましたが、現在の中国におけるキリスト教のあり方について、キリスト者自身の模索が続いていることを示していると思います。

現在中国では、この和偕社会（調和のある社会）、格差の克服された社会ということがよく強調されます。つまり、格差をこのままにしておけば貧しい地域の人々の不満が爆発してしまう、それは共産党政権への不信にもつながるわけですから、これを克服するということが非常に重要であるというわけです。そういう中で、実際に例えばYWCA、YMCAも政府の社会福祉事業に対しての協力を積極的に

行っています。私も上海のYWCAの活動を見学したことがあるのですが、例えば老人ホームの経営のプロジェクトを手伝ったり、幼児教育等にも協力するといったことをやっています。そうした形で模索が続いているわけです。

また、中華人民共和国になって中国YWCAの総幹事を長年務めた鄧裕志という女性がいます。共産党が統一戦線というものを重要視する中で、中華人民共和国建国直前に開かれた重要会議に宗教界の人々も出席します。鄧裕志もこの会議に出席したのですが、鄧はいわば人民共和国のクリスチヤンの代表的な人物として、中国におけるキリスト教のクリスチヤニティーと愛国主義というものが矛盾しないものであるということ、自ら体现した人物だと思いません。

次に、中国の女性についてまとめたいと思います。中華人民共和国が成立すると毛沢東の指導により共産党政権のもと、女性の経済的自立の実現がイコール女性解放の達成であるということから、上から女性の社会労働への動員ということが次々と行われていきます。それは実際に女性の経済的自立を実現したので、大変重要な意味を持ちました。友人の中国人女性の一人は、働かない自分というものは想

像できないほど働くことが自身の中で内在化していると言います。現在中国は、女性も働くのが当たり前の社会となっています。

しかし、家事・育児の分担は未解決のまま残されてきました。様々な統計を見ると、妻もフルタイムで働いていたとしても家事・育児の従事時間というのは、男性と女性を分けて見た場合、夫よりも妻の方がずっと長くなっており、農村は都市よりそれが顕著です。

それでは改革開放政策以降、どういうふうな女性やジェンダーの状況が変わったかというと、先ほど言いましたが、市場経済化が進む中で経済発展というのは確かに実現していくんですが、その中では格差も拡大していきます。とりわけ労働力としての女性を男性と比べると、女性の場合は生理や出産がありますから、効率が良くない労働力であるとみなされていくわけです。毛沢東の計画経済の時代においては、女性が限りなく男性化していく、男性と同化していく、あるいは無性化していくことが女性の解放であることと認識されて、様々な険しい労働現場にも女性が出ていくことが奨励されました。しかし改革開放時代になると、同化よりも女性と男性との間の差異が強調され、異化というも

のが進行していきます。

そして例えば、女性の労働権を阻害するような現象が生まれてきます。九〇年代以降、赤字の国有企業の大規模な改革が進むと、最初にリストラされたのは特別な知識や技術、学歴のない中年女性たちでした。さらには女子大生の就職難といったような現象も出てきます。また、生殖が国家によって管理される一人っ子政策が開始されると、性別のアンバランスという非常に危険な状況も生まれてきました。つまり、妊娠中の出産前検査で女の子だと分ると、特に農村の場合中絶するようなことが出てきています。優生学的な発想が顕著化しているような状況もあります。このように目覚ましい経済発展をする中国においても、女性、ジェンダーに関してはまだいろいろな課題が残されているわけです。

こうして見てきた時に、キリスト教というものの研究ないし理解というものがより進むということは、女性の課題というものを考える意味においても非常に重要であると思います。また、かつてのような中国の近現代史イコール革命史、共産党史であるという限定された捉え方ではなく、ジェンダー視点を入れつつ中国の近現代史を包括的に再構

築していくためには、多元的視角としてのキリスト教研究の、今後のさらなる発展と深化というものが必要ではないかと考えています。

以上でお話を終わらせて頂きます。御清聴ありがとうございました。

〔付記〕 本稿は二〇一一年五月二二日、大阪経済大学で行われた第九回春季歴史講演会の講演内容を加除訂正したものである。

(1) 顧長声『伝教士与近代中国』（上海人民出版社、一九八一年）、顧衛民『基督教与近代中国社会』（上海人民出版社、一九九六年）、陶飛亜『辺縁の歴史―基督教与近代中国』（上海古籍出版社、二〇〇五年）。教育に関する研究については、周洪宇・張雲芳『中国教会教育史研究文献要目（一九六一―二〇〇三）』（章開沅・馬敏主編『基督教与中国文化叢刊』第六輯、湖北教育出版社、二〇〇四年）を参照。

(2) 上海社会科学院歴史研究所所長の熊月之は、帝国主義侵略の象徴である租界が、同時に外国文化受容の窓口としての重要な機能を備えていたことに注目して、租界のもつ両義性を先駆的に指摘したが、こうした、具体的な歴史の中に租界の果たした役割を実証的にとらえようと

する姿勢は、キリスト教を評価する場合にも不可欠であるろう。

(3) 以下は、阮仁沢・高振農主編『上海宗教史』(上海人民出版社、一九九二年)、張化『上海宗教通覽』(上海古籍出版社、二〇〇四年)による。

(4) 程謫凡『中国現代女子教育史』(中華書局、一九三六年)、盧燕貞『中国近代女子教育史』(台北、文史哲出版社、一九八九年)、雷良波等『中国女子教育史』(武漢出版社、一九九三年)、佐藤尚子『米中教育交流史研究序説—中国ミッションスクールの研究』(龍溪書舎、一九九〇年)、末次玲子『辛亥革命期の婦人解放運動とプロテストント女子教育(上)(下)』、『歴史評論』二八〇、二八一号、一九七三年九月、一〇月)等。

(5) Nancy Boyd, *Emissaries: The Overseas Work of the American YWCA 1895-1970*, New York: The Woman's Press, 1986.

(6) 「前言」(陶飛亜編『性別与歴史—近代中国婦女与基督教』上海人民出版社、二〇〇六年)。

(7) 纏足と反纏足運動については、「纏足」「反纏足運動」(関西中国女性史研究会編『中国女性史入門—女たちの今と昔』人文書院、二〇〇五年)、「不纏足運動」(中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』青木書店、二〇〇四年、岡本隆三『纏足物語』(東方書店、一九八六年)、夏曉虹著、清水賢一郎・星野幸代訳『纏足をほごいた女たち』(朝日新聞社、一九九八

年)、ドロシー・コー「中国の衣服と体のイメージ—六世紀から一九世紀におけるヨーロッパ人の旅行記から—」(中国女性史研究会編『論集 中国女性史』吉川弘文館、一九九九年)、同著、小野和子・小野啓子訳『纏足の靴—小さな足の文化史』(平凡社、二〇〇五年)、坂元ひろ子『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』(岩波書店、二〇〇四年)、東田雅博『纏足の発見—ある英国女性と清末中国』(大修館書店、二〇〇四年)、馮驥才著、納村公子訳『三寸金蓮(てんそくものがたり)』(重紀書房、一九八八年)を参照。

(8) 註(4)の各文献と、「女学校の誕生」(同右『中国女性史入門—女たちの今と昔』)、「キリスト教と女性」(同右『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』)を参照。

(9) 王治心撰、徐以驊導読『中国基督教史綱』(上海古籍出版社、二〇〇四年)二七〇頁。

(10) 中西女塾編『中西女塾章程』(上海永興印書館、一九二二年)を参照。

(11) 金陵女子大学は一九二二年にアメリカの八つの教団が連合して創設した大学で、現在は南京師範大学になっている。同大学については、章開沅主編、孫海英著『教会大学在中国 金陵百屋房—金陵女子大学』(河北教育出版社、二〇〇四年)と、張連紅主編『金陵女子大学校史』(江蘇人民出版社、二〇〇五年)を参照。

(12) 「YWCAと社会活動—排外主義に抗して」前掲『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』、九五〜九八頁を

参照。

(13) 『女青年』、『女子青年界』（共に、日本YWCAの機関誌）、日本YWCA八〇年史編集委員会編『水を風を光を 日本YWCA八〇年』（日本キリスト教女子青年会、一九八七年）、日本YWCA歴史小委員会編『年表日本YWCA八〇年史』（同、一九八五年）を参照。

（いしかわ てるこ・大妻女子大学比較文化学部教授）